

旧奈良町の町並調査

建造物研究室

奈良市は、昭和13年に計画決定した都市計画道路杉ヶ町高畑線の事業化を進めている。その予定路線の一部が現在の元興寺の北側を通ることになっているが、この地区は旧奈良町の町家の様相をよく残しているため、奈良市では昭和56年度に、当該道路の建設によって取り壊される町家の調査を行なうことになり、建造物研究室がこの調査に協力した。調査地区は、片原町・御所馬場町から中院町・北室町を通り、北風呂町に至る約800mの区間である。

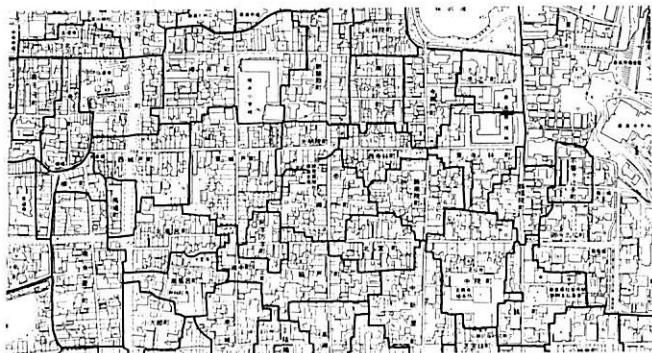
調査地区は、奈良時代には平城京左京四条七坊の元興寺寺地内外にあたるところであり、中世には大乘院門跡郷となり、以後商工業が栄え、奈良町の中心的な地域となっていた。

調査対象家屋は、外観からの観察によって必要と認められた家屋の内、同意の得られた17戸について、平面図・立面図・断面図の作成と、関連資料の収集、一部の復原調査を行なったが、道路建設に伴う用地買収との関係などいくつかの要因のために、調査の内容には不十分な点が多い。この点については以下に示すいくつかの課題とともに今後の研究課題としたい。

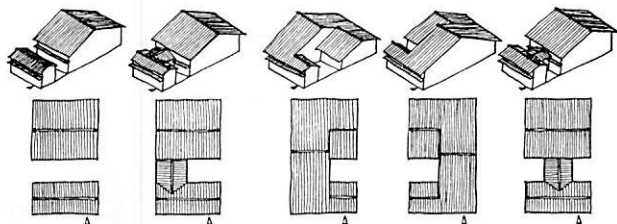
調査家屋はすべて江戸時代末期から戦前までに建てられたものであり、いずれも伝統的様式をよく残していると同時に、明治から大正にかけてのものには建築当時の新しい材料を用いているものもみられる。17軒の内、町家が14軒、残り3軒は主屋が道路より引込んで建つ邸宅型である。邸宅型の家屋はいずれも御所馬場町にあるが、この地区は保井元庫赤丸本『奈良町絵図』などに、大乘院の坊人などの居住地であり、一般の町家とは異なっていたことが明示され

ており、現在の敷地及び家屋もそうした歴史を反映していることがわかる。

町家には片側をトオリニワにして、1列3～4室または2列4～6室の居室をもつ、一般的な町家が多いが、梁間差のある2棟を前後に平行して建てる表屋造の家が5軒みられた。表屋造は幕末に京阪の大型町家に流行した新しい型式で、これが奈良まで及んでいたことは注目される。奈良町における一般的町家以外の形式の町家の分布やその



調査地区



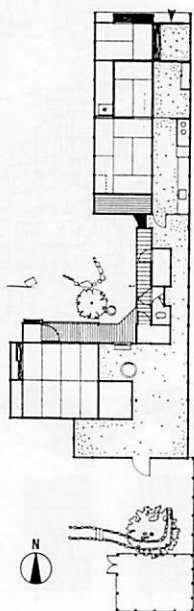
表屋造の類型

歴史的意味については今後の課題となろう。一方、町家の規模についてみると、今回調査分については間口2間から14間までであるが、4〜5間のものが最も多い。間口の狭い町家が多いことは今回の調査地区に限らず旧奈良町全体について言えることであり、しかも記録や文書から確認できるように、中世からそうした狭い敷地割りが出現していることは注目に値する。都市的な視点から調査は充分に行なえなかったが、多数残る奈良町絵図から、奈良町の変遷と、現在の状況が近世奈良町の様相をよく残していることがうかがわれる。

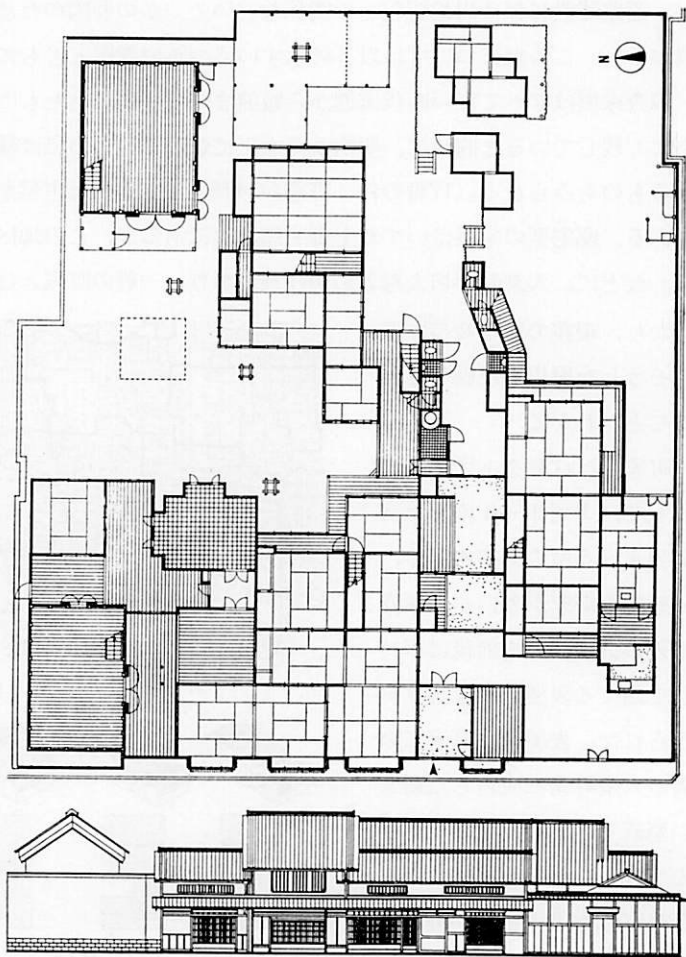
調査家屋の内、下御門町のM家は旧奈良町の中でも有数の大規模町家である。主屋棟・座敷棟の他に、離れ座敷・洋館・その他の付属屋をもつ。主屋の一部は表屋造で、外観もよく整っている。明治初期から中期にかけて順次整備されたと伝える。奈良の町家の質の高さをよく示している。一方、北風呂町のM家は間口2間半の極めて小規模な町家である。中院町のO家も間口2間の町家であり、これらの極端に小規模な町屋が多いのが奈良町の特徴である。

以上調査の概略を記したが、来年度から4カ年計画で旧奈良市街全体の町並調査が予定されており、指摘した課題は来年度以降の調査で解明してゆきたいと考えている。56年度の調査内容は奈良市町並建造物群専門調査会『奈良町』(1982)にまとめた。

(吉田 靖・山岸常人)



北風呂町M家平面図



下御所町M家平面・立面図